

モンゴル考古学と瓦磚研究の意義—匈奴の瓦磚生産を中心に—

佐川 正敏（東北学院大学教授）

瓦磚研究を始めて 35 年、1991 年から中国へ、そして韓国、ロシア、2008 年からモンゴルへと広げてきた。モンゴル人瓦磚研究者の養成が今後の課題であるのは、瓦磚が匈奴時代以来、政治・宗教的組織による中国式都城や仏教寺院等の造営に際してモンゴル各地で生産、使用された重要な考古資料だからである。佐川は、㉗匈奴の窯跡ホスティン・ボラク 2・3 遺跡（白杵勲氏の科研費）、㉘ウイグル可汗国東端の推定官衙跡シャルツ・オール 1 遺跡（木山克彦氏の科研費）、㉙遼の推定鎮州城跡のチントルゴイ城跡と窯跡（千田嘉博氏の奈良大学研究費）の発掘に参加し、現地で瓦磚を悉皆選別・調査し、匈奴を中心に以下の成果を得た。

①磚の基準尺は㉗で漢尺、㉘で唐尺であり、建物の造営尺を反映。丸・平瓦の規格も規定か。

②範型の同範認定により、㉗の軒丸瓦の窯跡から 20km 北のテレルジン土城跡への供給が初確定。

③軒丸瓦と磚は中国で陶範製とされてきたが、㉗で範傷進行が確認されて、木範の存在も確定し、生産と供給の時間差が初解明。

④㉗に窯を含む官営工房跡が潜在。

⑤瓦磚文様と製作技術については、㉗は漢長安城、㉘はオールド・バリク城と唐長安城、㉙は遼上京と比較しつつ、特に漢が造瓦に直接関与した内モンゴル南部、漢と匈奴が交錯した同北部、匈奴が主体的に関与した地域間で微視的比較を展開中である。